

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
大学院生研究
2003 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科	心理学 専攻
指導教員	所属・職名		氏 名		
	コミュニティ福祉学部教授		箕口 雅博 印		
自然・人文の別	自然	<input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	共同 名
研究課題	周産期における女性の心理社会的ニーズとサポートに関する縦断的研究				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学部研究科・心理学専攻 博士前期課程 2 年		相川 祐里 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学部研究科・心理学専攻 修士 2 年		相川 祐里		
研究期間	2003 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300 字で記入, 図・グラフ等は使用しないこと.)

本研究では, 周産期の女性に対する医療者からのソーシャル・サポートのあり方を検討するため, 周産期の女性 6 名に, 妊娠 32 週, 産後 5 日目, 産後 1 ヶ月の 3 時点で半構造化面接法を実施した. そして彼女らが経験した医療者からのサポートを, ポジティブ・サポート, ネガティブ・サポート, サポートの欠如の 3 つのカテゴリーに分け, 内容分析を行なった. 結果, 医療者が同じ知識や技術を用いても, その使い方に問題があると, 正反対の効果を生み出すことが明らかとなった. 医療者はサポート提供者として認知された存在であり, その働きに対する期待も影響力も大きい. そこでの食い違いは, 通常の対人関係におけるそれより, 相手に大きなダメージを与えるということ, 医療者は自覚し, 利用者が期待するような, 「個別性」を重視した, 「迅速」で「具体的」, そして「専門的技術に裏付けられた」関わりの必要性が考えられた.

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入.)

[周産期] [主観的体験] [ソーシャル・サポート]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと.)**研究成果**

周産期の女性が主観的に体験するソーシャル・サポートの質を、サポート源を医療者に絞り、ポジティブ・サポートとネガティブ・サポート、サポートの欠如の3種類の概念に基づき分類し、検討した。結果、本研究で対象とした女性は、医療者からのソーシャル・サポートに対して、数多くの場面で「助けになった」と評価していたものの、同じように多くの場面で「助けにならなかった、迷惑だった、嫌な思いをした」という判断にいたる主観的な体験を表出していた。

分析の結果得られた各時期のポジティブ・サポート、ネガティブ・サポートを構成する概念と、それに含まれる内容について説明する。

1) 妊娠期

妊娠期のポジティブ・サポートとしては「共感に基づいた関わり」、「具体的な情報提供」、「スクリーニング的な存在」、「直接的医療行為」、「場・機会の提供」の5つのカテゴリーが抽出された。一方妊娠期のネガティブ・サポートとしては、「対象者不在の情報提供」、「共感が欠如した関わり」の2つのカテゴリーが抽出された。

2) 出産期

出産期のポジティブ・サポートとしては「具体的で肯定的な声かけ」、「スクリーニング的に存在すること」、「状態予測の助けとなる情報提供」、「技術に裏付けられた、快適な身体的ケア」、「継続性のある関わり」の5つのカテゴリーが抽出された。出産期のネガティブ・サポートとしては、「一方的な医療行為」、「気持ちを表出できない雰囲気」が抽出された。

3) 入院期

入院期のポジティブ・サポートとして抽出されてきたのは、母親たちが安心して依存できる条件であり、「母親モデル」の提示、「聞きやすい環境」、「丁寧で優しい対応」、「ルーティーン化していない対応」、「技術に裏付けられた関わり」の5つのカテゴリーである。入院期のネガティブ・サポートは「個別性が排除された対応」、「医療的正義の押し付け」、「自己判断力を奪うような情報提供」の3つのカテゴリーになった。

4) 産後1ヶ月間

産後1ヶ月間のポジティブ・サポートとして抽出されたのは、「子どもに関する不安の解消につながる医療的対応」、「迅速で直接的な専門家の関わり」、「専門家に相談できる場の提供」、「仲間と集える場の提供」であり、現状では医療者との関わりは他の時期に比べて少なくなってくる産後1ヶ月間においても、母親となったばかりの女性たちには依然として子どもに関する心配事や不安が存在し、医療者との関わりを他の時期と同じように求めていると考えられた。産後1ヶ月間におけるネガティブ・サポートでは、「対象者不在の情報提供」、「共感の欠如」の2つのカテゴリーが抽出された。

結論

周産期の女性と医療者との間でも、ソーシャル・サポートの一側面である「ネガティブ・サポート」が発生していることが明らかになった。そして「ネガティブ・サポート」の要因と「ポジティブ・サポート」の因子を比較すると、医療者のサポートが意図した効果をもたらすには、そのサポートは受け手が必要としているサポートであるか、医療者が自身の発する影響力を考慮しているかが大きく関与していることが分かった。

研究成果の概要 つづき

さらに医療者はサポート提供者として認知された存在であり、その分その働きに対する期待も大きく、そこでのサポートの食い違いは、相手にとって通常の対人関係においてより、大きなダメージを与えるものになる。そのことを医療者は自覚し利用者が期待するような、「個別性」を重視した、「迅速」で「具体的」、そして「専門的技術に裏付けられた」関わりをする必要がある。また周産期の女性は、時間の流れと共にその特徴や抱える問題が変化する存在であり、医療的なサポートを必要とする程度も経時的に変わる。その事を医療者は自覚し、専門的技術を一方的にただ与えるのではなく、その時期に応じたサポートの内容、提供の仕方を考え、共にその人の「産む力」や「育てる力」を育てる意識を持つことが必要と考える。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名, 論文標題, 雑誌名, 巻号, 発行年, ページ)
- ②図書 (著者名, 出版者, 書名, 発行年, 総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名, 開催日, 開催場所)
- ④その他 (学会発表, 研究報告書の印刷等)

研究発表 予定

① 雑誌論文

著者名 : 相川祐里

論文表題 : 周産期の女性に対する医療者からのソーシャル・サポート効果の検討
—ポジティブ・サポート, ネガティブ・サポート概念を用いて—

雑誌名 : 日本助産学会誌

巻号, 発行年 : 18巻1号, 2004発行に掲載予定, 現在投稿後 査読願ひ申請中